



—大磯町とハワイ移民から、地域・日本・世界へ—

『図説 日本史通覧』



3 授業案と展開例

①1886(明治19)年の海外渡航者を調べよう

[illegible]

アジア歴史資料センター（原本所蔵：国立公文書館）Ref.A07061668300

なお、1893年にハワイ王国が滅亡し、アメリカ合衆国の領土となる過程に関しては、「歴史総合」で触れると効果的だろう。

②仮説を立てる

生徒の解答例

- ③ハワイで日本人は何をしていたのかを知らう

生徒にはペアになってもらい、提示された写真資料（**図3**）と絵画資料（**図4**）の読み取りを行わせた。その際、補足説明やタイトルなどは伏せ、ハワイに渡航した日本人が何をしていたのかを自分たちで考えさせた。



㊦ ① ハワイのさとうきび畑の日本人女性労働者 ハワイ政府の要請で、1885(明治18)年、政府間の取り決めによる官約移民^{かんやく}が始まり、移住者はさとうきび畑などで働いた。しかし労働条件は悪く、ハワイがアメリカ領となると、日本人移民は、より賃金の高いアメリカ本土に向かい、各地に日本人街ができた。(国立国会図書館蔵)


図3 ハワイのさとうきび畑の日本人女性労働者
 『図説 日本史通覧』 p.239



『明治十八年に於ける布哇砂糖耕地の情景』
 〈写真提供：ユニフォトプレス〉

生徒の解答例

- ・ 集団で農業をしている。
- ・ 細長い棒を持っている。
- ・ (植物) さとうきびがある。
- ・ 日本人だけで？ 農業している。 など

農業と考える生徒が多く、その作物に関しては、暖かい土地で栽培されることをヒントに出すと、沖縄から連想してさとうきびと答えてくれる生徒がいた。農業・さとうきびの言葉が出てきたところで、日本人が砂糖生産の労働力としてハワイへ渡航したことを説明していく。

(2) ハワイの状況について知る

ハワイでなぜ多くの日本人が受け入れられたのか、受け入れ国側の状況を理解するため、1840～90年代のハワイに関する資料（表）を用意し理解を深めた。

表 1840年代～90年代におけるハワイの状況と日本人の官約移民（ハワイ州観光局ウェブサイトなどより筆者作成）

1849年	アメリカ合衆国とハワイ王国との和親条約が結ばれ、ゴールドラッシュに湧く米国西海岸への輸出増加が砂糖生産を促進。南北戦争もあり、米国南部からの砂糖の供給が減少したことでハワイからの輸入が必要となった。 砂糖農園での労働力確保と病気などによりハワイアン的人口減少。 1820年のハワイアンの推定数値13万人が1850年には8万人まで落ち込む。
1864年	カメハメハ5世が移民局を発足。
1881年	カラカウア王が明治天皇に謁見し日本からの移民を要請。
1885年	明治政府が正式に認めた「官約移民」が開始され、945名ほどが到着。砂糖農園で3年間就労するという契約だった。
1893年	ハワイ王国が終わりを告げる。それまでに、政府間で約2万9000人の官約移民が渡航。

①なぜハワイは移民を必要としていたのだろうか？

ハワイでは、アメリカとの関係が深まる中、砂糖の生産が重要視されたことと、ハワイアン人口の減少により労働力が必要とされていたことが背景にある。日本側は、近代化による農村部の困窮や、急激な人口増加などを背景にしていた。1880年代の日本の出来事を生徒に確認させるのもよいだろう。

以上のように、ハワイ王国と日本のお互いの利益が合致したため「官約移民」として送り出すことができた。

(3) 大磯とハワイの関係を知る

①日本人移民が直面した課題とは何だろうか？

大磯とハワイのつながりを知り、日本人の移民がハワイで直面した課題を理解することで、地域と世界のつながりを意識させ、現代的課題にも目を向けてもらいたい。

そこでハワイの日本人移民の労働運動を知るうえで重要な神奈川県大磯町出身の後藤潤^{かつ}（図5）に関する資料を提示した。

後藤潤は、1885年に第1回の官約移民としてハワイに渡航した日本人の一人である。西日本からのハワイ移民が大多数を占める中、神奈川県から移民として海を渡った者もいた。彼は、大磯町役場で勤務をしていたが、ハワイ移住後は、自身の英語力を生かして労働者のまとめ役や農園主との交渉役を務めた。砂糖農園で過酷な労働を強いられていた日本人労働者の権利を守る活動をしていたが、彼を敵対視していた白人の農園経営者らによるリンチに

より、28歳の若さで殺害された。犯人には恩赦となった者もあり、ハワイへ移住した日本人の立場の弱さが浮き彫りとなる事件となった。

1985年、官約移民100周年に際して、後藤潤の追悼式典が行われ、ハワイ州副知事ジョン・ワイヘエが演説を



図5 後藤潤（1861～1889）
（写真提供：Bishop Museum Archives/ユニフォンプレス）

行った。生徒には、演説（資料1）と日本人移民が歌い継いだ民謡（資料2）を基に、日本人移民がどのような課題に直面したのか考察・調べ学習をさせた。

「我々は、我々の立っている基盤を決して忘れてはなりません。我々は、ハワイのプランテーション社会の厳しい土壌に、社会的公正の種を蒔いた後藤潤のような人物を、記憶にとどめなければなりません。我々は、今日我々が享受しているもののために、いかに一般の人々が驚くべき犠牲を払ったかを、忘れてはなりません。彼のなしたことは、日系二世、三世、四世だけでなく、ハワイ州の私達全てを鼓舞するものであります。」

堀江里香（2021）『ハワイ日系人の歴史の変遷 アメリカから蘇る「英雄」後藤潤』彩流社 p.159

資料1 ハワイ州副知事ジョン・ワイヘエの演説

ハワイ、ハワイと夢見てきたが
流す涙は甘蔗（きび）の中
行こか メリケン [アメリカ本土] 帰ろか 日本
ここが思案の ハワイ国
今日のホレホレ 辛くはないよ
昨日届いた 里便り
横浜 [日本の出発地] 出るときゃ 涙ででたが
今は子もある 孫もある
条約切れても 帰れぬやつは
未はハワイの ポイ [ハワイ原住民の主食] の肥
ハワイ ハワイと 来てみりや地獄
ボース [耕地経営者] は悪魔で ルナ [耕地の現場監督] は鬼
カネ [男] はカチケン [さとうきびの茎を取る]
ワヒネ [女] はハッパイコウ [さとうきびを運ぶ]
夫婦仲良く 共稼ぎ
条約切れるし 未練は残る
ダンブロウ [下の耕地] のワヒネにゃ 気が残る

立命館大学アート・リサーチセンター Web サイト「アメリカンフォークソング資料保存プロジェクト」[] の注は一部要約、省略しています。
<https://www.arc.ritsumeai.ac.jp/folksong/multiculture/009.html> (2025年6月9日閲覧)

資料2 ハワイ日系人の民謡「ホレホレ節」

立命館大学アート・リサーチセンターの Web サイトによると、ハワイへ渡航した日本人移民の間では「ホレホレ節」と呼ばれる民謡が生まれた。「ホレホレ」とは、さとうきびの枯れ葉を手作業でかき落としていく作業のことである。他の耕地労働に比べ力がいらなかったため、主に女性の仕事だった。炎天下での「ホレホレ」の作業の中で励ましあい、力を合わせるために生まれたものと

考えられており、歌詞にはさまざまなバリエーションがあって、日本語・英語・ハワイ語が混じっているという。

生徒には、以上の2つの資料を提示し、当時の日本人が直面した困難などを自由に考察させた。また、資料の中で分からない言葉があれば、生徒は自身が持っている端末を使って調べ学習を行った。

後藤については、大磯町出身であることを話した際、生徒たちは自分たちの身近な地域が日本史や世界史につながっていることを実感したようだった。

(4)授業のまとめ

生徒には授業の最後に、資料を調べて学んだことを文章でまとめさせ、関心を持ったことや今後調べたいテーマ・内容について考えさせた。授業の最後に疑問や問いを立てることは探究学習への一歩になるはずだ。

①授業を受けて、さらに関心を持ったことを書こう

生徒が立てた問いの例

- ・各国にいる日本人移民の比較をしたい。
- ・大磯でハワイ移民（後藤など）の歴史を残し、広めるにはどうすればいいか？
- ・ハワイに根付く日系人の文化とは何か？
- ・戦時中の日系人の歴史について。
- ・ブラジルに行った人はどのような理由で行ったのか？
- ・神奈川から他に、どこの国に移住する人がいたのか？
- ・今の日本の移民状況とその課題とは何か？ など

生徒たちの問いの中には、現代的な諸課題に目を向けたものもあれば、比較したり、文化に焦点を当てたりしたものもあった。探究する時間がなかったとしても、問いを立てることは生徒の主体的な学びや思考力の育成に寄与するだろう。

4 探究学習につなげるために

授業では、通史的な学びはもちろん、時代や地域を横断した学びを通して理解が深められるよう意識している。本稿では「大磯とハワイ移民」のつながりを通じて、地域、日本、世界をテーマにしつつ、外国人労働者の増加といった現代の移民問題にも触れた。今後もできる限り、授業の最初や最後に、現代の諸課題に目を向けてもらえるよう工夫をしていきたい。

筆者は、生徒に夏休みや冬休みにスライド作成を課題として出している。これまでの授業で自ら出した問いの中から1つ選び、探究活動を行い、それらをスライドにまとめ、提出させている。

スライド作成では以下の点に注意するよう指示して

いる。

1. なぜその問いを選んだのか理由を述べること。

2. 史資料やグラフを適切に配置すること。

3. 実地調査が可能なら調査し、撮影すること。

（博物館、資料館、石碑、遺跡などに行く）

4. 引用文献を適切に記載すること。

上記1～4を総合的に判断し、資料の使い方や考察がよくできているものは匿名にして他の生徒と共有できるようにしている。一方で、40人のクラスを複数持つ場合、大人数のレポートを適切に評価するのは難しい。生徒同士で評価し合う「ピア評価」を用いるなど、評価については今後も改善が必要である。ただ、答えにたどりつかなかった場合も評価することを伝え、安心して自分の問いを起点に歴史を学ぶことに力点を置いていきたい。

5 最後に

探究学習やテーマ学習を行うに当たっては、そのテーマをどのように選定するかが極めて重要である。生徒が自ら問いを立て学びを深めるため、身近な内容に加え、国や時代などをまたぐような広がりを持つテーマを設定できるよう、教員は考慮していきたい。

『図説 日本史通覧』には、テーマに応じた図版やグラフなど、多様な史資料が豊富に掲載されており、資料に基づいた授業づくりにおいて大きな助けとなる。本稿ではハワイ移民をテーマに扱ったが、他の地域や国に視野を広げた授業展開も十分に可能である。日々の授業づくりにおいても、地域の話題や生徒の興味関心を引くことができ、受験対策に際しても、資料集の視点や構成は大いに活用できる。また、絵画や文字資料の読み解き演習、コラムなどのページを活用することで、定期テストの作問、探究活動の導入、さらには発展的な問いへのアプローチにもつなげることができるだろう。

探究学習を通して、生徒が自ら問いを立て、疑問を持ちながら学ぶことで、歴史を学ぶ意義や現代の諸課題を多角的・多面的に捉える力が育まれると期待される。今後も、「日本史探究」が目指す「探究する力」を育むための授業実践を模索していきたい。

〈参考文献等〉

- ・堀江里香（2021）『ハワイ日系人の歴史的変遷ーアメリカから蘇る「英雄」後藤潤』彩流社
- ・大磯町郷土資料館（2016）『大磯町郷土資料館だより』No.36
- ・中鉢奈津子（2008）「ハワイ日系人社会の特徴」『外務省調査月報』2007年度No.4
- ・JICAウェブサイト「海外移住資料館」